

吉田絃二郎の思想とタゴール

新田 杏 奈

一 絃二郎とタゴール

大正四年（一九一五）前後、日本は空前の「タゴール・ブーム」に湧いていた。^①この段階までの翻訳者を整理すると、二つの流れに大別できる。一方は、英文学者詩人増野三良を代表とする「大正詩壇系」の流れであり、他方はキリスト教総合雑誌「六合雑誌」を中心とする「自由キリスト教系」の流れである。この頃、「六合雑誌」の編集員を務める傍ら、タゴールの研究に熱心に取り組んだ作家がいた。大正中期から昭和初期の文壇で活躍し、独特の感傷的美文で知られた吉田絃二郎である。

絃二郎のタゴールに関する評論や翻訳は、大正初期頃に集中している。絃二郎研究の第一人者である原岡秀人は、その背景について「直接的には恐らくタゴールの紹介者では第一人者といわれる内ヶ崎教授からの影響もあったとは思ふ」と分析しながらも、絃二郎自身も「タゴールを私淑し、崇拜すべき人とし

て見ていた」ことを明らかにしている。^②また、原岡によれば、大正四年四月刊行の『タゴールの哲学と文芸』という評論書は、絃二郎の出版界へのデビュー作であった。^③本書の「自序」において、絃二郎はタゴールに関し、次のように述べている。

私は彼れの哲学について、殊にその歓喜、光明を高調する一点についてはまだ充分彼れと同感同鳴の交響樂を奏することはできないやうに思ふ。彼れのこの方面の思想は私にとりて余りに聖者的であり、余りに明るいものであるからである。けれども彼れの旅人を労はる憐情に於いて、或ひは榕樹の葉擦れに声なき世界の神秘をあこがれ行く驚異の念に於いて、彼れは私の友であり、先人であることを信ぜずには居られない。

絃二郎は、必ずしもタゴールの絶対的な礼讀者ではなかった。むしろ、タゴールを相対的に評価した人物である。この点で、既に論述した増野三良とは対照的であった。^④大正五年一月、絃

二郎は「この人を申して多くの思想家の中から一人を選択することでもできません、同じ人のうちでも共鳴するところもあり、共鳴しかねるところもあります」と述べている。絃二郎はしばしばタゴールに対する「不満」も書いた。彼は「大正四年五月」『六合雑誌』に掲載した「タゴールの詩と印度の自然」の中で、次のように述べている。⁽⁸⁾

タゴールは私たちに向つてブラママの大歓喜を伝へ、萬有の底を流る、永久の生命を語る。彼れの聖教徒的な生活は恐らく絶えずブラママの永生と光明とに動かされてゐるのであらう。けれども彼れの信徒な生活の奥には、何うして運命に順従する弱者の心が潜んでゐないだらうか？

私は彼れを尊敬する彼れの思想を尊敬する。彼れの信徒な聖徒的な生活を尊敬する。けれどもタゴールのために、更らに人類のために悲しき運命を悲しむ。恐らく斯やうな批判は彼れ自身と雖ども気づかないであらう。

従来の研究においては、右のような絃二郎の視線が「啓蒙的」で「帝國的」であるとされてきた。例えば、南アジア地域研究者の中島岳志は、「吉田の見るところ、インド人（及びインド人であるタゴール）は、近代的な主体を獲得する以前の「自然」の中にある。インド人は近代人が失った「従順さ」をもった高貴な非文明人であり、「近代の外部」に存在している。そしてこのような存在は、人間としての純粹な本源の発露である一方、「運命に順従する弱者の心」の現れでもある」と論じている。

さらに、中島は「世界が文明化し、帝國主義化する中、「自然」の中に埋没して暮らすタゴールの運命を一方的に嘆き、自らが置かれた立場に気付いていないタゴールに対して、啓蒙的な観点から教諭するという位置に立っている」と分析して、「このような言説は、まさに西洋のオリエンタリストたちが、東洋の中に「近代の他者」としての「高貴なる野蛮人」を見た帝國的まなざしと同根のものである」と批判している。⁽⁹⁾ 絃二郎のタゴール受容が、その豊富さに反し、これまで重要視されてこなかった背景には、こうした否定的な見解の存在があると考えられる。

しかし、中島の論には幾つかの点で問題がある。第一に、中島の言及は、絃二郎の「タゴールの詩と印度の自然」という論考に限られており、その他の膨大な評論が見落とされている。第二に、中島はサイド（Edward Wadie Said）の「オリエンタリズム論」⁽¹⁰⁾を根拠として挙げているが、絃二郎がタゴールを「自然主義のアンチテーゼ」として受容したという事実を見落としている。同時代の彼の言説を見ていくと、絃二郎は明らかに、「自然主義を通過した文学者」としての「懐疑的視線」を有しており、それが彼自身のタゴール観を形成する上で、最も大きな影響を及ぼしたのである。

本稿では、特に絃二郎の文学的立場に注目し、まずは、絃二郎のタゴール読書の経緯と言及の全貌を整理する。さらに、これを踏まえて、その思想面、特に芸術観や宗教観にも言及してタゴールとの共鳴関係を追究し、従来あまり評価されてこな

かった絃二郎のタゴール評価を再考した。また、彼が論じた「運命に従順する弱者」とはどのような意味なのか。「悲しき運命」とは何を指すのか。彼の他の言説を広く見渡した上で、その文脈を検討していきたい。

二 絃二郎の略歴

まずは絃二郎の略歴を紹介する。^①吉田絃二郎(本名源次郎)は、明治十九年(一八八六)十一月二日、佐賀県神埼郡神埼町に、父吉田栄作、母リフの二男として誕生した。父は旧鍋島藩士であつたが、維新後に立ち上げた酒造事業に失敗したため、家庭は貧しかったという。明治二十三年、絃二郎が四歳の時に一家は佐世保に移住し、高等小学校までを長崎で暮らした。小学校卒業後は一時、長崎のミッションスクール東山学院に学び、在学時には洗礼も受けた。その後、家庭の事情により、東山学院を途中退学して、明治三十三年四月、郷里の佐賀工業学校金工科に入學、三年間を佐賀で過ごしている。

明治三十八年一月、絃二郎は、中学教員の資格を得るといふ志を立てて上京し、早稲田大学予科に進學、明治三十九年九月、早稲田大学英文科に入學した。当時の早稲田には、坪内逍遙や島村抱月がいた。絃二郎は在學時、両師から貴重な指導を受けている。さらに、在學中に、志願兵、見習士官として対馬の砲兵隊に所屬し、対馬では約二年間の軍隊生活を送つた。復學後は文芸協会に入会し、芸術座のヒロイン松井須磨子や、近代劇協

会の主幹上山草人、佐々木積等とも知り合うようになった。さらに、逍遙の指導の下で加能作次郎等と共に戯曲の研究も行っている。明治四四年七月、絃二郎は二五歳で、早稲田大学英文科を卒業した。

卒業後は、「六合雑誌」の編集に携わり、文士としての執筆活動に邁進していく。その後、大正四年(一九一五)七月に、母校早稲田大学の講師となつた。主に英語や英文学の授業を担当した。それとほぼ同時期に「六合雑誌」編集の職を辞している。大学の教え子には、井伏鱒二等がいた。作家としては、大正六年一〇月「早稲田文学」に掲載された「島の秋」が好評を得て、文壇への出世作となる。同大教授となつてからも各誌に作品を寄稿し、昭和九年(一九三四)の退職後も旺盛な活動が晩年まで続いた。昭和十二年、妻が死去。昭和二十六年には自身もパーキンソン病と診断される。昭和三十三年三月、「山はるかに」(絶筆)の最終編を執筆し、その一カ月後の四月二一日、脳出血の症状を併発して永眠した。享年七〇。

現在、『吉田絃二郎全集』(新潮社、全一八巻)の他、『吉田絃二郎感想選集』(新潮社、全一〇巻)や『吉田絃二郎童話全集』(文芸春秋社、全五巻)に、その著作がまとめられている。

三 絃二郎と「六合雑誌」

タゴールとの関連で最も注目すべきは、絃二郎の「六合雑誌」編集員時代である。原岡の研究によれば、絃二郎は早稲田大学

在学時、同大教授であつた内ヶ崎作三郎の推薦を得て、早稲田中学の教師を目指していたが、中学教員の検定未済の為などの理由で謝絶されるという不幸に見舞われた。そこで絃二郎は、内ヶ崎の指示により、高等学校程度の英語教科書の編集に携わることになる。卒業後は通信局嘱託となる傍ら、当時内ヶ崎が主筆を務めていた「六合雜誌」の編集にも従事するようになったらしい。

管見では、大正二年（一九一三）二月に刊行された「六合雜誌」の後書きに「鈴木氏が余り忙しいので今月から私が編集のお手伝ひを致すことに相成り申候。まだ活字の番号も知つてゐないほどに御座候へば、なかなかの困難に御座候。万事お手柔かにお叱り下され度候」とあるので、編集員としての本格的な仕事は、この頃から始まったと思われる。絃二郎はそのまま、早稲田大学講師の職が決まる大正四年頃まで、編集員として携わった。

原岡は「六合雜誌」について「絃二郎のこゝでの執筆は多く、かなりの実績をあげた」と評価している。¹⁵「六合雜誌」の索引によれば、明治四五年（一九一二）六月から、大正九年の二月までに絃二郎が執筆したものは一〇三篇に及ぶ。その内容を見ると、「感想」「評論」「翻訳」「創作戯曲」など実に多様だが、この中で圧倒的に多かったのが「感想」と呼ばれる随筆で、全体の半数以上を占めている。うちわけは、知人に宛てた書簡風のものや、季節に関するもの、また自身の文学観や信仰観を、

自由に綴ったものが多い。六合雜誌に寄稿したこれらの文章は、後に「感想録」として『生の悲劇』（大同館書店、大五・二）や『生命の微光』（大同館書店、大六・一）の他、一部『小鳥の来る日』（新潮社、大一一・八）にも収録されている。原岡は、この時期を特に絃二郎の「習作期」と呼び、「後の作家としてデビューするにふさわしい大事な時期でもあつたのである」と評価している。¹⁷

四 絃二郎のタゴール読書

『吉田絃二郎全集 第十八巻 第六感想集』には、絃二郎自らが作成した「タゴールの著作並に参考書」という項目が収録されており、三九冊のタゴールに関する英書が記載されている。この三九冊の内、絃二郎がどの程度まで購入していたのかは不明だが、大正四年（一九一五）の時点で絃二郎の評論を読む限り、少なくとも次の八冊は確実に読了していたと思われる。

- ① 『サーダナ』(Sadhana) 一九一三年
- ② 『ギタンジャリ』(Gitanjali) 一九一三年
- ③ 『新月』(The Crescent Moon) 一九一三年
- ④ 『園丁』(The Gardener) 一九一三年
- ⑤ 『チトラ』(Chitra) 一九一三年
- ⑥ 『郵便局』(The Post Office) 一九一四年
- ⑦ 『暗室の王』(The King of the Dark Chamber) 一九一四年
- ⑧ 『デベンドラナート・タゴール自叙伝』(The Autobiography

of Mahārshi Devendrānath Tagore) 一九一四年

次にこれらの八冊に関して、いつ頃絃二郎が入手し、読んだのかということであるが、まず入手に関して、大正五年五月七日付の「読売新聞」の記事によると、タゴールの英書が日本に到着したのは大正三年の六、七月頃のことと、まず Sadhana、The Crescent Moon、Gitanjali、The Gardener の順で丸善に入ってきたとある。

一 昨年の六七月頃タゴールの名が漸く喧伝され始めた頃真先に丸善に來たのが「森林哲学、生の実現」で、最初の二百部は瞬く間に売切れた、次に「新月」「ギタンジャリ」「園丁」の順で入つて來たが、この四冊は荷が入るとモウ買手が待つてゐると言つた具合で、来るのも来るのも注文に足りないほどの景氣であつた、で着荷が遅れたために、売る機会を失した怨みさへあつた、「生の実現」などは千部以上も確かに出てゐる

S 生「タゴール熱」(「読売新聞」一九一六年五月七日)

その熱狂ぶりからすれば、當時下谷の根岸に居を構えていた絃二郎がこの騒ぎに気づかぬはずがない。タゴールの英書は丸善経由で入手したと考えるのが自然である。さて、絃二郎の読書時期についてであるが、大正三年一月の「六合雜誌」に「ラビンドラナス・タゴール」が「海水を一つの甕のなかに容れて擔ぐ人はその海水の重さを感じる。しかし人が海水そのものの中に飛び込んで行けば何の重さをも感じない」といふやうな意味

のこと言つてゐるのを読んだ」という記述がある⁽¹⁵⁾。これは「サーダナ (Sadhana)」に出てくる一節であるから、この時点で既に彼が「サーダナ」を読んでいたことが分かる。

さらに、翌年大正四年二月の「六合雜誌」に、「立て琴の絃」と「友よ」と付して二篇を、三月に「幻想の美よ」と付して一篇のタゴールの詩を翻訳している⁽¹⁶⁾。これらは全て『園丁 (The Gardener)』の詩であるから、この時期より前に読まれたことが分かる。その他、『デベンドラナート・タゴール自叙伝 (The Autobiography of Mahārshi Devendrānath Tagore)』、『新月 (The Crescent Moon)』、『チトラ (Chitra)』、『郵便局 (The Post Office)』、『暗室の王 (The King of the Dark Chamber)』の五冊は同年四月八日刊行の評論書『タゴールの哲学と文芸』の中で紹介されている。

また、翌月の五月一日に刊行された評論書『タゴール聖者の生活』では『ギタンジャリ (Gitanjali)』の中から一二篇の詩が翻訳されている。よつて絃二郎は、早くとも大正三年の六七月頃には丸善経由でこれらのタゴール諸作品を入手し、遅くとも翌年の五月頃までには全てを読了していたと思われる。

五 絃二郎のタゴールへの言及

続いて評論などで、絃二郎が直接タゴールに言及しているものを取り上げて、その全体像を確認していきたい。絃二郎がタゴールについて言及している主なものは、以下の如くである。

なお、絃二郎が感想の中で触れているものも併記した。

・大正三年（一九一四）

① 感想「落葉するまで」（『六合雑誌』四〇六号、二月一日）

② 感想「永遠の疑惑」（『六合雑誌』四〇七号、二月一日）

③ 「タゴールの自我の解放」（『読売新聞』二月二三日）

・大正四年（一九一五）

④ 評論「タゴールと崇拜の生活」（『六合雑誌』四一〇号、三月一日）

⑤ 評論「タゴールと靈意識」（『創造』、三月）

⑥ 評論書『タゴールの哲学と文芸』（大同館書店、四月八日）

⑦ 評論「タゴール哲学の断片」（『六合雑誌』四一二号、五月一日）

⑧ 評論「タゴールの詩と印度の自然」（右同）

⑨ 評論「タゴールの『個人と宇宙』観」（右同）

⑩ 評論「タゴールの研究」（『中央公論』、五月一日）

⑪ 評論書『タゴール聖者の生活』（天弦堂書房、五月一日）

⑫ 評論「愛国詩人としてのタゴール」（『読売新聞』五月二八日）

・大正五年（一九一六）

⑬ 評論「デエンドラナアト・タゴール（一）」（『六合雑誌』四二五号六月一日）

⑭ 評論「ヒマラヤの聖者」（『六合雑誌』四二六号、七月一日）

⑮ 感想「タゴールの印象と感想」（右同）

⑯ 評論「タゴールの音楽教育」『聖タゴール』（同文館、七月八日）

⑰ 感想「タゴールを訪ふの記」（『六合雑誌』四二七号、八月一日）

⑱ 評論『名士のタゴール観』（城南社、八月）

・大正一三年（一九二四）

⑲ 評論「旅の詩人来るータゴール翁について（上）」（『東京朝日新聞』六月三日）

⑳ 評論「旅の詩人来るータゴール翁について（下）」（『東京朝日新聞』六月四日）

・昭和四年（一九二九）

㉑ 評論書『タゴールの詩と言葉』^{※1}（文芸春秋社、六月八日）

・昭和九年（一九三四年）

㉒ 全集『吉田絃二郎全集第一八巻』^{※2}（新潮社、五月二九日）

・昭和一六年（一九四一）

㉓ 評論「聖愛の詩人タゴール」（『東京朝日新聞』八月九日）

㉔ 評論「聖愛の詩人タゴール」（『東京朝日新聞』八月一〇日）

※1 大正五年刊行の『タゴール聖者の生活』を再編して刊行された評論書。

※2 昭和四年刊行の『タゴールの詩と言葉』がそのまま収録されている。

これらを見ても分かることは、絃二郎のタゴールに対する言及が、大正四、五年（一九一五、一九一六）に集中しているこ

とである。これについてはいくつかの要因が考えられる。まず主要な原因として挙げられるのは、絃二郎が編集していた「六合雑誌」²²がこの時期急速にタゴールに対する関心を高めていたことである。「六合雑誌」は、大正四年五月に「タゴールと印度文化号」を、また五年七月に「タゴール来朝記念号」を刊行しており、絃二郎には、タゴールに言及する機会が多く与えられていた。

しかし、もちろんそれだけではない。注目すべきはこの頃、一時代を形成した自然主義文学が衰退し、新しい文学への期待が高まっていたことである。²³原岡によれば、絃二郎が尊敬し、直接の指導を仰いで最も影響を受けたのは島村抱月であった。²⁴坪内逍遙からもイブセンやストリンドベルクなどの手ほどきを受けている。このことからしても、絃二郎が自然主義勢力絶頂期の早稲田にいて、学生時代を過ごした事実はやはり無視できないであろう。

彼は、大正五年五月に刊行した『タゴール聖者の生活』に収録された評論「反抗の生活と信仰の生活」において「私たちは少くともこの十数年来悪魔の洗礼を受けつゝあつた。破壊より破壊に、爆破より爆破に疾風の如き勢を以て荒れ廻つてゐた。私たちは余りに不安、焦燥、矛盾、争闘に馴らされた」と述べており、自然主義に深く影響されてきた自らを振り返っている。²⁵絃二郎は「かやうに悪魔的な傾向にとりつかれた私たちの眼を以て見る時にタゴールの哲学は余りに靜平に充ち感謝に充ち

建設に充ちたものである」²⁶と語っている。しかし、それならばなぜ、彼は慣れ親しんだ思潮と対照的なタゴールを敢えて受容したのだろうか。その必要性について、絃二郎自身は次のように説明している。

破壊にのみ価値を認め悪魔的傾向にのみ眞実の生活を認めんとする不具者のな人生の見方を矯め直さんとすると、ろに彼れの思想の意義がある。また個人主義の流れを汲むだ人々の誤れる自我の觀念を正さむとするところに彼れの哲学の意義がある。換言すれば彼れの思想を取り容るゝ所以は私たちの自我の内容を最つと大きなものとし、豊かなものとせんがためである。私たちの世界を広くし、私たちの生活に永久性を付与せんがためである。それと同時に悪魔的な傲慢な私たちの心に信徒と謙遜の美德とを注ぎ込めんがためである。

これは明らかに、絃二郎がタゴールを「自然主義のアンチテーゼ」として受容したことを示している。大正初期と言えば、自然主義がかつての新鮮味を失い、その限界が痛烈に認識された時期である。自然主義に育てられた絃二郎のような若い作家が、その限界を超越するために、敢えて対置するタゴールの思想に興味を持ったとしても、何も不思議ではない。

しかし、そのような時代の潮流にも増して重要なのは、絃二郎がタゴールの作品、主に詩や戯曲を高く評価していたという事実である。彼はタゴールの作品について、実に事細かく意見

を述べている。例えば、その詩については、「園丁」のなかに或ひは「新月」のなかにわたくしたちはしばしば渡頭に面した窓に凭りかゝつてゐる黒い瞳の少年の面影を見出す²⁸⁾と述べ、さらに「わたくしたちは「ギタンジャリ」を読んでゐる間に幾度か地上の麗人と天上の神とを結びつけて何の矛盾をも感じないかれ自身の純情を見出す²⁹⁾」として、「世界の文学史上かくのごとくやさしき、かくのごとく麗しき、かくのごとき切々たる神へのあこがれをうたつた詩を見出すことはできないであらう³⁰⁾」とまで評価している。

一方で、タゴールの戯曲についても「その舞台上に於ける人物の出し入れや、場面の變化や、ステージ・エフエクトといふやうなことに關しては余ほど練熟を欠いたところがあるやうに思はれる」としながら、「けれども彼れの夢幻的な思想を盛られた色彩と音の變化を有する思想劇として見る時は、美しい大詩劇を見せられるやうな氣がするにちがひない³¹⁾」、「暗室の王」のなかに暗示されてある神は、恐らくタゴールの神觀を最も具体化したものであらう³²⁾などと考察も加えて、個々の作品に対する研究にも余念がなかった。これらの絃二郎のタゴール作品に対する評価を踏まえた上で、次に彼のタゴール觀とはどのようなものであつたのか、具体的に見ていきたい。

私は、その中には重要な二つの側面があつたと考えている。それは即ち、「驚異」と「疑惑」の二面性である。これらは、彼の思想的特徴とも一致する。絃二郎は、大正五年二月に『生

の悲劇』という一冊の感想録を刊行している。本書は、主に絃二郎が大正元年から五年にかけて「六合雜誌」に掲載した隨筆をまとめたものであるが、この頃の彼の思想を把握する上で貴重な資料である。ここでは、そうした絃二郎の感想などを手掛かりに、「自然への驚異」と「永遠への疑惑」という二つの観点から彼の思想とタゴールとの共鳴關係を検討してみたい。

六 自然への驚異

絃二郎は自著『タゴールの哲学と文芸』の序文において、「ラビンドラナート・タゴールは自然への崇敬者であり、驚異者である点に於いて私は非常に強い共鳴を感じる詩人であり、哲学者である³³⁾」と書いている。「自然への驚異者」であることは、彼がタゴールに最も共感した点に外ならない。

絃二郎は実に自然を愛した作家であつた。例えば、彼に「自然の愛³⁴⁾」という感想があるが、その中で彼は「生まれた地が人の少い片田舎の曠野のなかであつたせいか、わたしにとりては自然ほど親しみのあるものはない³⁵⁾」と書いている。対人關係において、傷つき悩むことの多かつた絃二郎にとって、物言わぬ自然は、ただ一つの安らぎを得られる場所であつたようである。絃二郎自身は、この心持ちを次のような言葉で表現している³⁶⁾。

自然は私のために泣いては呉れぬ。柔らかな手を持つて抱いては呉れぬ。けれどもかれは私を辱しめない。私を拒

まない。(中略)かれは私の屍に蛆虫をわかせられるかもしれない。それでもかれは、私を憎んではゐない。私の屍の下からは可憐な白百合が咲くこともあらう。野の鳥は私の枕辺で神秘的讃歌を歌ふかもしれぬ。自然は寂しいたゞ一つの私の隠れ家である。

絃二郎は、日常の中で何か本然的な孤独感に苛まれることが少なくなかつた。彼は自らを、「殆ど病的だと考へられるまで寂しがり家である」と分析している。その孤独感を埋めるための一つの手段が、彼のささやかな「信仰生活」であつた。絃二郎はある時は教会、ある時は寺など、様々な集団を頼るが、しかし不幸にも、その試みはどれも失敗に終わった。彼は「宗教」においても「芸術」においても、何か特定のものに絶対的な価値を置くことの出来る性格ではなかつたからである。彼の心中には、集団に安寧を求めることを強烈に拒絶する「自我の意識」が深く根を張っていた。

例えば、大正二年(一九一三)九月の「六合雜誌」に彼が寄稿した「驚異の殿堂」という感想にも、彼の強い自我意識を垣間見ることが出来る。原岡は「これは多分絃二郎自身の人生や生き方をめぐつての小論である」と説明しているが、この感想の中で、絃二郎は「キリストの宗教、釈迦の宗教、ミケロアンゼロの芸術、トルストイの芸術、みなかれ等の一人一人の宗教であり、芸術であつて、私の宗教でも、芸術でもない」と述べた上で、さらに次のような主張を展開している。

しかし若しこゝに宗教的生活を営む人があつて、キリストにインスピレーションを感じる人があつたならば、それは差し支へはないが、しかしその人自身にはその人自身の創造的宗教を味知しなければならぬ。その最後の到達点はキリストと同一であるにしても、それに詣る努力そのものは、その人自身の批評と創造から湧いたものでなければならぬ。

あらゆる宗教や芸術に学びながらも、最終的には「個人の創造的宗教及び、芸術」に辿り着かなければならない、というのが絃二郎の信念であつた。この主張は、それ自体彼の強い自我意識を象徴している。絃二郎は結局、どの既存の宗教にもうまく馴染むことができなかった。実際、彼は「私に落ちついて宗教といふものを意識して味だけの氣分を湧かさせるだけの力を有つた教会はなかつた。私は深い懷疑に陥つた」ことを告白している。

しかし、その彼にも、たった一つ忘れることの出来ない懐かしいものがあつた。それが、他ならぬ「大自然への驚異」であつた。絃二郎は「私は運命論者となつて自然の凡べてのものを憎んだ。しかし戸山の原から、あの柏の森あたりをさ迷ふときだけは、心から自然を懐しいと思つた」と語り、「若し眞実の生活といふことが言へるならば、それはあの森のなかに入つて、驚異に包まれながら想念に酔ふことのできたあの数十分の時間であつた」と述べている。「自然の中に潜む何ものか」に対す

る驚異の念、それだけは彼の懷疑的な思考からも最後まで取り除くことが出来ないものであった。そんな絃二郎は、タゴールの作品世界を次のように表現している。⁽¹³⁾

かれの世界では郵便配達夫も、渡し守も、市場に行く女たちもみな夢の国に住む者の美しさと尊さと落着きとを持つてゐる。路傍に忘れられた花籠にはたゞ一莖の花が凋んでゐる。それすらがかれの詩の国では夏の微風に眼に見えぬ神の国のさ、やきをさ、やいてゐる。

また彼は、次のように書いている。⁽¹⁴⁾

私がベンを走らせながら、窓の硝子窓を通して、隣り境の檜の梢に見入つてゐると、その一と葉一と葉が私に何か話しかけてゐるやうである。私は盲いたる私の心を悲しむ。私はあまりに不可思議な生の表現の事相に対して、驚異の目を瞠らないでは居れない。

絃二郎は、彼を取り囲む日常の自然の中に、何か優しい夢幻の息吹を感じ、その囁きを聞いている驚異の念を感じる心を持っていた。また彼自身、そのような感性を非常に大切にしていたと思われる。彼は後に出世作である『島の秋』の「自序」で「私は冷たい理智や批判や狭いイジムの上から人生を取り扱はないで、できるならば嬰兒のやうな心で、この幽玄な人生の底深くはいつて行つて見たいと思ふ」、「私は解剖のメスを持つ科学者の眼で人生を見ないで、直観の境に於いて自然と融合する詩人の心を持つて人生を見たい」と書いているほどである。⁽¹⁵⁾ この世

にある自然の美しさや不可思議さが、子供のような無垢な目でもって描き出されているタゴールの作品世界は、まさに、絃二郎の憧憬の的であつたと言えよう。生きとし生けるものの不可思議なる顕現、そのようなものに對する「驚異の心」こそが、絃二郎とタゴールの世界とが最も矛盾なく共鳴した部分であつたと思われる。

七 永遠への疑惑

一方で、絃二郎とタゴールの間には思想的に共振しかねる部分もあつた。例えば、絃二郎は大正三年二月の「六合雜誌」に掲載した「永遠の疑惑」という感想で、次のように書いている。⁽¹⁶⁾

メエテルリンクも『死』のなかに未来を真実の解放だといふやうなことを言つてゐるし、タゴールも亦「死は燭の消滅であつて、太陽の壊滅ではない」といふやうなことを説いてゐる。メエテルリンクにもタゴールにも余程共通な点があつて一人は神秘といふことから、一人は調和といふことから立つて人生を見てゐるが、二人ともむしろ光明や希望を抱いた味方をする人々である。神秘といふことも調和といふことも私には共鳴するところが多い。けれどもその行き方は私とは全然異なつてゐるやうに思ふ。「死」に對する彼れ等の觀念が示してゐるやうに、私は決して神秘もしくは調和といふことに對しても彼れ等のやうな明るい、

なだらかな、韻律詩でもうたふやうな気分で取り容れることはできない。

あらゆるものが歓喜のうちに生れ、歓喜に生き歓喜の未来に向つて進んで行くといふやうな見方は何うしても自分には考へられない。

絃二郎はタゴールの考え方は自分に取つて「明るすぎる」ということを繰り返して述べている。絃二郎は「私はむしろ常に消極的な人生の見方をやつてゐる」と語る。彼は人間の運命について、次のように考へていた。

私たちの過去は恐らくは無限の暗黒であつたであらう。私たちの未来は恐らくはまた無限の暗であらう。永久の闇より永久の闇に入る二つの世界の境にありて私たちは利那の現実の生命に生きてゐる。暗と暗とをつなぐ利那的な現実生命の意識！ 何といふ寂しい、悲しい人類の運命であらう。

絃二郎にとつて、死とはすなわち「永遠の死」であつた。生は死を境として永遠の暗に葬られなければならないものであつた。この「利那のみの生命」が絃二郎の信じられる生命観であつた。「人生とは何であるか。生とは何であるか。暗と暗との境の一光明界に於いて、表現せられたる美の味到境に過ぎない。私達は寂しい旅人である」と彼は語る。これは、当時の彼の一贯した人生観であつた。絃二郎は、タゴールとメーテルリンクに対して「彼れ等にとりては白い花であり、銀の露であつた神

秘なり調和なりが、私には黒い花であり、暗の露であるやうに思はれる」と述べる。けれど最終的に、「自分にとりてはそれがより多く幸福であるとか、より多く明るいといふことよりも、私自身にとりてそれがより多く真実性を持つてゐると直感せらるゝ、が故に自分に抱いてゐる思想なり、心持ちなりを大切に思ふのである」と述べているのである。果たして「永遠なる生命の存在を肯定するか、否定するか」、この一点において、絃二郎とタゴールは互いに交わらない見解を持つていたと言えよう。

八 絃二郎のタゴール評価

以上、絃二郎の思想において、タゴールと共鳴する部分、またそうでない部分を見てきた。ここではそれらを踏まえた上で、彼のタゴールに対する評価を再考してみる。絃二郎は、前述したようにタゴールの詩や戯曲を高く評価していた。そして、「タゴールの詩を読むで私たちが齊しく感ずることは、彼れの詩が巧まれた詩でなくして、彼れの詩は飽くまで自然的な詩であり、利那利那の優しみに充ちた女性的な情感のほとばしりであるといふことである」と述べている。「やさしい」「懐かしい」「女性的」などは、彼がタゴールの詩から受ける好ましい印象であつた。

一方で絃二郎は、タゴールについて「彼れは反抗者の歌をうたはない。彼れの眼に映ずる自然は凡べて美しきものである」

という点において、不満も述べている。彼はタゴールの詩を「南欧の芸術に見る燃えるやうな情調に震いてはゐない」「上へ上へと自由にその感情を奔らすことをしないで、何とはなしにいつも一種のあきらめを持つてゐる。落ち着きを持つてゐる」と評している。さらに、絃二郎は同時代の文壇において、絶大な支持を受けていたイブセンやトルストイとタゴールを比較して次のような興味深い考察も行っている。

彼れにはイブセンやトルストイに見るやうな矛盾や焦燥がない。彼れにはトルストイに見るやうな生活に対する争闘がない、イブセンに見るやうな反抗の心がない。彼れは飽くまでも、先づ自らの立ち場を一步高くして、人生に對してゐる。かれは到底詩によりて人生を觀、詩によりて人生を築かんとする者である。彼れは到底トルストイの執着を持つてゐない。かれは到底イブセンの執拗な憎惡心を持つてゐない。かれは荒涼たる大ロシヤの預言者に比して余りにやさしい詩人である。かれはスカンデネビアの大思想家に比して余りにデリカシイを持つた詩人である。

彼の言説を概観すれば、絃二郎のタゴール觀の中心は、あくまでも「聖者的」で「敬虔な詩人」という点にあつたと思われる。そして、絃二郎のタゴール觀は、そのような側面のみが特に誇張されて述べられている傾向がある。実際のタゴールの人生において、トルストイに見られるやうな生活上の格闘が全くなかつたかと言へば、そこには大きな誤解がある。例えば、タ

ゴールは父から譲り受けたシャンティニケタンという土地に、子供たちのための学園を造り、また現地農民のための試験的な農業施設も建設している。そして時に、その学園の資金調達の為に四方奔走し、妻の装飾品を売ったこともあつた。タゴールもまた、現実と格闘した一人の人間であつたのである。

九 おわりに

従來の研究において、吉田絃二郎の文学的立場は明確にされてこなかつた。岡保生は、この問題について「絃二郎の位置づけのゆれは、裏を返せば彼が自然主義—理想主義—凡人主義をつなぐ三者の、いわば接点に位置していた」と指摘している。

しかし、タゴール受容の観点からは、あくまで自然主義を基調として「自我主張者」、「利己的現実主義者」の立場から、その意識拡大の為に取り容れた人物であつたと言える。ゆえに彼は、タゴールのあまりに調和的な信徒的な世界を「物足りなく」「弱々しく」感じた部分も率直に指摘することができたのである。勿論、絃二郎に先行研究で言われるやうな「オリエンタリズム」的思考が全くなかつたとは言わないが、結果として、彼のタゴールに対する視線を「帝國的」と述べてしまふのは、やはり早計である。絃二郎が論じた「運命に順従する弱者」や「悲しき運命」という言葉の背景には「帝國的視線」というよりも、むしろ自然主義を通過した文学者の「懷疑的視線」があつたと見るのがより適切である。そして、両者の間にあつたのは、よ

り深い部分で「現実主義」と「理想主義」の相剋であり、生命に対する「絶対的肯定論」か「否定的懷疑論」かという立場の違いであった。

しかし、そのような思想的隔たりを超えて、絃二郎が早い時期にタゴールを評価していたのは特筆すべきことであろう。この意味において、彼のタゴール論は今後さらに評価されて然るべきである。なお、絃二郎の文学作品とタゴールとの影響関係については、今後の研究課題としたい。

※書名、引用文などについては新字体に改めた。

※本稿「六合雑誌」の調査にあたっては全て「本学資料センター」所蔵のものを閲覧させて頂いた。厚く御礼申し上げる。

注

(1) 当時の新聞記事がその熱狂を伝えている。「インドの詩聖タゴール氏の来朝は愈々本物になつて、この二十七日には神戸へ着く筈だといふが、之に連れて想起するのは、一頃の日本におけるタゴール流行である、ノベル賞金を貰ふまでは、その名は勿論数多い著書の一冊でも丸善の書架に紛込んでいなかったのが、ノベル賞金をとるとドツとその名がひろがつて、物凄いほどの流行となつた」(S生「タゴール熱」『読売新聞』大正五年五月七日、五頁)。

(2) 内ヶ崎作三郎(一八七七一—一九四七)。評論家、政治家。東大英文卒。英オックスフォード大学に留学。クリスチャンで「六合雑誌」の主筆を務め、多くの宗教的評論文を執筆した。早大教授。

同理事でもあり、また立憲民政党の衆議院議員としても活躍した。

(3) 原岡秀人「吉田絃二郎の文学・人と作品」(近代文藝社、五一頁、一九九三年)。

(4) 原岡「大正四年四月、絃二郎は『タゴールの哲学と文芸』を初めて出版するのである。これも出版界へのデビューで、多くの好評を得ている。これは翌五年の五月に来朝したインドの詩聖タゴールの紹介としては一つの先駆をなしたものと言えよう」(右書、五三頁)。

(5) 吉田絃二郎「自序」『タゴールの哲学と文芸』(大同館書店、四頁、一九一五年)。

(6) 新田杏奈「増野三良とタゴール詩集」『青山語文』第四九号(青山学院大学日本文学会、二〇一九年三月)。

(7) 絃二郎「現代思潮——現代思想家の何人に最も共鳴する?」『六合雑誌』四二〇号(統一基督教弘道会、一〇一—一〇二頁、一九一六年一月)。

(8) 絃二郎「タゴールの詩と印度の自然」『六合雑誌』四二二号(統一基督教弘道会、二七頁、一九一五年五月)。

(9) 中島岳志「タゴール、現る——大正初期の「タゴール熱」と初来日を巡って」『大倉山論集』第五十五輯、大倉精神文化研究所、二〇〇九年三月)。

(10) 中島は「エドワード・サイードは「オリエンタリズム」を『東洋』と(しばしば)『西洋』とされるもののあいだに設けられた存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式」とし、「オリエントを

支配し再構成し威圧するための西洋の様式であると論じた。オリエンタリズムが内包する西洋／東洋という二分法は、東洋をエキゾチックな存在に押し込め、そこに西洋近代が喪失したロマンを見出す一方で、「後進的な東洋」を他者として対象化する¹⁹⁾と、彼らとは異なる理性的で文明的な西洋近代の主体を確認する装置として機能した²⁰⁾（右論文、二三三頁）と述べている。

(11) 絃二郎の略歴は原岡の研究を参照した。（注（3）書）。

(12) 原岡（右書、五〇頁）。

(13) 鈴木文治（一八八五—一九四六）。労働運動家。東大卒。在野のキリスト教伝道師本間俊平の影響により社会問題に目覚め、海老名弾正の本郷教会に所属。一九二一年東京朝日新聞社を退社し、統一基督教弘道会の社会事業部長に就任。一二年友愛会を設立。一九年に大日本労働総同盟友愛会、二一年に日本労働総同盟と改称し、三〇年まで会長を務めた。二八年から代議士。戦後は社会党顧問。

(14) 絃二郎「冬の窓より」「六合雑誌」三八五号（統一基督教弘道会、一二〇頁、一九二三年二月一日）。

(15) 原岡（注（3）書、五一頁）。

(16) 『復刻版—六合雑誌解説／執筆者・作品名索引付』『創造者』第1号（不二出版、一九九八年）。

(17) 原岡（注（3）書、五一頁）。

(18) S生「タゴール熱」「読売新聞」（朝刊五頁、一九一六年五月七日）。

(19) 絃二郎「落葉するまで」「六合雑誌」四〇六号（統一基督教弘道会、一一七頁、一九一四年二月一日）。

(20) "When we take a pitcherful of water from the sea it has its weight, but when we take a dip into sea itself a thousand pitcherful of water flow above our head, and we do not feel their weight" Rabindranath Tagore, *Sadhana* (Macmillan London, 1913), p57.

(21) 絃二郎「立て琴の絃」「友よ」「六合雑誌」四〇九号（統一基督教弘道会、五二頁、八八頁、一九一五年二月一日）。吉田「幻想の美よ」四一〇号（一〇頁、一九一五年三月一日）。

(22) 大正四年五月「六合雑誌」の「編集たより」に「本号は「英国文化号」とするつもりであつたが恰度近々印度の詩人、哲学者ラビンドラナート・タゴール氏が来朝するといふことであるから、同氏を迎ふるの準備として、我が思想界や一般の人々にタゴールを紹介するつもりで、予定を変更して「タゴールと印度文化号」とした」とある。大正四年以降の急速なタゴール紹介の背景には、タゴール来朝に対する大きな期待があった（『六合雑誌』四一二号、統一基督教弘道会、一二五頁、一九一五年五月一日）。

(23) 絃二郎「自然主義的作品が行きつまつてから此方、いろいろな方面に向つて生面を切り拓かうとしてゐる人々か或は人道主義に或は一種のデカタンの享樂の底に、或は高踏的な態度からして若々しい創作面を開拓しようとしてゐる努力は一樣に認められる。何れにしても嘗て自然主義的傾向が靡然として当時の文壇の氣運

を一新したやうな鮮かさはないが、その新しいものを生まうとしてゐる苦痛は可なり底力の強いものであると思ふ」〔昨年の文壇〕「六合雜誌」四三三号、統一基督教弘道会、一五一頁、一九一七年一月一日。

(24) 原岡(注(3) 書、四七頁)。

(25) 絃二郎『タゴール聖者の生活』(天弦堂書房、七五—七六頁、一九一五)。

(26) 絃二郎(右書、七六頁)。

(27) 絃二郎(右書、八五頁)。

(28) 絃二郎『タゴールの詩と言葉』(文芸春秋社、二三—二四頁、一九二九年)。

(29) 絃二郎(右書、二三—三五頁)。

(30) 絃二郎(右書、同頁)。

(31) 絃二郎(注(5) 書、四三〇頁)。

(32) 絃二郎(右書、六七頁)。

(33) 絃二郎『自序』(注(5) 書、三一—四頁)。

(34) 「自然の愛へ」は『生の悲劇』(大同館書店、一九一六年)に収録された感想である。本稿では『吉田絃二郎全集』第十一卷(新潮社、一九三二年)所収のものを引用した。

(35) 絃二郎(右論、二三—三頁)。

(36) 絃二郎(右論、二三—三三—三四頁)。

(37) 絃二郎(右論、二三—三頁)。

(38) 原岡(注(3) 書、五二頁)。

(39) 絃二郎「驚異の殿堂」〔六合雜誌〕三九二号(統一基督教弘道会、七九頁、一九一三年九月一日)。

(40) 絃二郎(右書、七九—八〇頁)。

(41) 絃二郎(右論、七二頁)。

(42) 絃二郎(右論、同頁)。

(43) 絃二郎(注(28) 書、二頁)。

(44) 絃二郎「死の嘆美者となる前に」〔六合雜誌〕三九八号(統一基督教弘道会、二二頁、一九一四年三月一日)。

(45) 絃二郎『自序』『島の秋』(大同館書店、一一—二頁、一九一八年五月)。

(46) 絃二郎「永遠の疑惑」〔六合雜誌〕四〇七号(統一基督教弘道会、八四頁、一九一四年二月一日)。

(47) 絃二郎(右論、同頁)。

(48) 絃二郎『自序』『生の悲劇』。本稿は『吉田絃二郎全集』第十一卷(新潮社、一八一頁、一九三二年)を引用した。

(49) 絃二郎「自我燃焼の歎美」〔六合雜誌〕三九六号(統一基督教弘道会、一二頁、一九一四年一月一日)。

(50) 絃二郎(注(47) 論、八四—八五頁)。傍点、絃二郎。

(51) 絃二郎(注(25) 書、七頁)。

(52) 絃二郎(右書、二二頁)。

(53) 絃二郎(右書、一一—一二頁)。

(54) 絃二郎(右書、三七頁)。

(55) 岡保生「吉田絃二郎の小説(その一)」〔学苑〕三七三号(昭和

女子大学光葉会、七四―七五頁、一九七一年一月。

（につた・あんな／本学大学院博士前期課程学生）